

平成二十八年四月十日発行
皇學館論叢第四十九卷第二号 抜刷

論
評

張文宏「正岡子規漢詩の考察」

—中国古典の受容の様相—の漢詩について

高橋陽一

張文宏「正岡子規漢詩の考察

— 中国古典の受容の様相 — の漢詩について

高橋陽一

□ 要 旨

頭書の張氏論考において、主として通釈に疑義を呈する。多くは語釈に当たらないところがあつて句の解釈、延いては全体の通釈の筋が理解しにくくなっている。例えば本文三の〈感懷〉詩の第8句「樽俎誰力能ク泰平ヲ開カンヤ」を張氏は「樽俎を持つ將軍たちは誰が一体平和の世界を創れるのか」とするがこの「樽俎」、元の意味は「酒と肉」であるが宴席の喩えにも使われ、ここでは外交の喩えになつている。「外交交渉のみでは一体誰が平和への道を開くことができるだろうか」とすべきところ。また本文六

〈前赤壁画〉の典拠を陳壽『三国志』とするが蘇東坡『前赤壁賦』とすべきことは用語の一致を見れば明らかで解釈にも影響する。言及は張氏の引く十九詩中十一詩に及ぶ。

□ キーワード

張文宏 正岡子規漢詩 通釈 疑義

正岡子規の漢詩については殆ど知るところがなかったが、張氏論考⁽¹⁾により多くの漢詩が存在を知って大変興味深く感じた。一つ注意すべきは、渡部勝己⁽²⁾によれば子規の初期の漢詩は「入門書から題や句法をそのまま引き継いで試作したものが多く、典型的である。その傾向は明治十六年以降も暫く続く。」としていることで、詩を抄出する場合の参考にする必要があるだろう。つまり習作に子規漢詩の特徴、趣向を求めるのは適当でないかもしれないことである。

例えば張氏の引用する子規十二歳（明治十一年）の時の漢詩〈聞き規〉「一聲孤月下 啼血不堪聞 半夜空欹枕 古郷萬里雲」について一海知義は次のような指摘をしている⁽³⁾。

実はこの詩、タネ本がある。当時巷間には、漢詩創作の懇切丁寧な手引書が、何種類も出回っていた。…たとえば『幼学便覽』『詩工椎鑿』『詩語碎錦』などを繰ってみると、「客舍聞子規」「客夜聞鶉」などの詩題を示した項に、使用すべき詩語の例として、「一聲」「啼血」「孤月下」「不堪聞」といった二字熟語、三字熟語が、すべて平仄のしるしをつけてズバリと並べてある。少年子規の五絶二十文字のうち、右の三本に見えない用語例は、何と「古郷」の二字だけだった。

佐藤利行⁽⁴⁾及び張氏は「平仄の規則もきちんと守られている」

とするが、この五言絶句に平仄上の違反がないかという点、そうでもなくて結句第二字が孤平を侵している^(註1)。回避のためには「家郷萬里雲」とするか「古郷千里雲」などとする必要はある。この詩は子規が土屋久明から漢詩の手ほどきを受け始めた時期に重なるもので、明らかに習作の部類に入るだろう。子規は土屋に毎日五言絶句を一つづつ作り見てもらっていた、とのことである。このような習作的漢詩は張氏採用詩中、幾つか散見される。

張氏論考の構想などについては共感するところであるが、ただその通釈において、詩が十分には読みこなされていないのではないかと感じる点が一再ならずある。例えば先述の〈聞き規〉詩においても、張氏は結句「古郷萬里雲」を「子規が故郷松山を思っているものと思われる」とする。しかしこの詩は蜀の望帝杜宇が杜鵑と化して、秦に滅ぼされた故郷蜀を遥かに思つて「不如歸去^(註2)」と鳴いて血を吐いた、との話を詠んだものである。従つてこの結句は（子規が故郷を思つてではなく）望帝の化身杜鵑が古郷蜀を思つたのである。日本語表現に慣れないハンディもあるかと思うが、以下幾つか指摘をしたい。

詩題の下に参照の便のため張氏論考の頁を記した。張氏通釈中、問題点に傍点を附した。また強調したい部分に傍線を附した。原詩及び重要語句をゴシックとした。

一 武陵桃源 (23頁)

鶏犬數間屋 鶏犬數間ノ屋

衣裳似外人 衣裳外人ニ似タリ

桃花別天地 桃花別天地

不識晉邪秦 識ラズ晉ナルヤ秦ナルヤヲ

張氏通釈「広い家に鶏と犬がいる。そこに住んでいる陶淵明は、変な服を着ている。その地は桃の花に囲まれて、世の中とは別天地である。だから、桃の花の郷にいる陶淵明は、今は、晋の時代か、秦の時代かは、わからないのだ」

「鶏犬」については慣用句が幾つもある。

「鶏犬不聞」…鶏犬の音が聞かれないほど人煙寥落たる僻地。

「鶏犬不留」…鶏犬も留めないほど尽く地域を殺戮すること。

「鶏犬不驚」…鶏犬も驚き騒ぐことが無いほど軍隊の規律厳正なこと。

「鶏犬桑麻」…農村の生活安定。

「鶏犬相聞」(老子)…隣同士の村里の鶏犬の音が互いに聞こえるほど国土の狭いこと。

「鶏犬相聞」(陶淵明・武陵桃源)…村里ののどかな様子。

これらから「鶏犬」は鶏犬そのものよりも鶏犬が飼われている村里、農村など一つの地域単位を表している事が判る。最後に

の例が陶淵明で子規はこれを探って使っている。意味としてはこの村を指しているのみであろうが、原文の意味を付加してもよいだろう。

また「數間屋」を「広い家」とするが「間」はここでは量詞で家屋を勘定する単位として使われている。日本語では「軒」に相当する。だからここは「數軒の家屋があるのみだ」となる。中国の人なら「間」の意味に気付かないはずはないと思うのだが。起句の意味は「鶏犬もいるこの村里は僅かに數軒の家屋があるのみだ」となるだろう。

承句を「そこに住んでいる陶淵明は、変な服を着ている。」とするが陶淵明は『桃花源記』の語り手であつて漁人から聞いた話を語る形であるから登場人物にするのは奇妙である。ここは桃源境の住人の衣裳のことである。「悉如外人」と原文にある(「蒙求」)が、ここは外の人達と変らない衣裳を着している意味に解かれてきている。

通釈「こののどかな地域には數軒の家屋があるばかりだ」／着ている衣裳は外の人達と変りが無い／桃の花咲くこの地域は全くの別天地で／今が晉時代か秦時代かもこの人達には分らないのだ」

二 醉李白（24頁）

滿斟芙蓉殿上筵 滿斟ス芙蓉殿上ノ筵

笑揮醉筆坐君前 笑ヒテ醉筆ヲ君前ニ坐シテ揮フ

數行澆出磊塊氣 數行澆ギ出ス磊塊ノ氣

疑是銀河落九天 疑フラクハ是レ銀河ノ九天ヨリ落ツルカト

張氏通釈「李白は、唐玄宗の主宰した宴会に誘われて、芙蓉という美酒をいっぱい飲んだ。彼は少し酔い、笑いながら筆を揮って唐玄宗の前で詩を作った。詩の字間に逞しい気魄が溢れている。あたかも天の川が天空より落ちてくるかのようである。」

張氏は「芙蓉」を美酒の名とするが、美女や劍名には喩える用例があるが酒の喩えの用例はない。ここは牡丹の花咲く興慶宮の沈香亭で玄宗皇帝が二日酔いの李白を呼び出し、楊貴妃の為に詩を作るよう命じた話のことであろう。李白はたちどころに「清平調詩」三首を作り上げたという。だから「芙蓉」は美女のことで「芙蓉殿上筵」は美女楊貴妃が臨席する宮殿の宴會を意味している。

「磊塊」は石塊だが詩文に關係しては「文字の繁多複雑」の意味で使う。「氣」は詩句をひねり出す語氣の意であろう。転句は「數行の詩文の連なりを縷々紙面に注ぎかけるように捻出

した」とする。結句は元々澆の落ちる形容だが、ここでは語句を紡ぎ出す勢いを言っている。

通釈「十分酒が入って二日酔いの李白は楊貴妃の臨席する宮殿の宴席に臨んだ（要望に応じて）一笑して皇帝の前に坐し、酔うて筆を揮えば／何行もの詩の縷々たる連なりを紙面に注ぎかけるように書きいだす／あたかも銀河が九天から落ちるようなすさまじい勢いだ」

三 感懷（25頁）

1 老大飄零志未成 老大ニシテ飄零シ志未ダ成ラズ

2 江湖何処寄殘生 江湖何レノ処ニカ殘生ヲ寄セン

3 遼東落日烽烟絶 遼東ノ落日烽烟絶ヘ

4 台北浮雲殺氣橫 台北ノ浮雲殺氣橫タハル

5 憂國少陵空病肺 国ヲ憂フルコト少陵ノゴトキモ空シク肺

ヲ病ミ

6 多情杜牧尚談兵 情ノ多キコト杜牧ノゴトキモ尚モ兵ヲ談ス

7 枕戈死難將軍在 戈ヲ枕ニ難ニ死ス將軍在リ

8 樽俎誰能開泰平 樽俎誰カ能ク泰平ヲ開カンヤ

これは律詩であるから領聯、頸聯は勿論対句である。この詩、明治十九年の作とするが、⁶日清戦争は明治二十七年、八年、子規が遼東へ行ったのも明治二十八年である。底本（子規全集

第八卷)を確認すると作詩は明治二十九年が正しい。

張氏通釈「私は年をとったが、まだ落ち着かない状態で、志を遂げていない。広い世の中、一体、どこで余生を過ごすのか。遼東の落日に日清戦争の砲煙が消えた。台北の浮雲に殺気が横たわっている。憂国の杜甫(号は少陵)は空しく肺病にかかっている。一方で多情の杜牧はなお兵士の話を詩吟にする。兵器を枕にして戦争で死んだ兵士は多いが、將軍はまだ生きていゝ。樽俎を持つ將軍たちは誰が一体平和の世界を創れるのか。」

語釈「老大」年紀大。「飄零」衰える、落魄。「浮雲」漢代、農民の反乱部隊を浮雲と称した。「死難」①困難に逢って死ぬ、②国難に当って命を投げ出す。「樽俎」酒と肉、ここでは宴席、更には外交の喩えとして使われている。

張氏は第5句「憂国少陵空病肺」を「憂国の杜甫は空しく肺病にかかっている」とするが、杜甫が肺病とは聞いたことが無い。肺病は子規のことであるから、ここは子規が自分のことを述べていると見て「私は杜甫であるかのように国を憂えているが、その気持ちも空しく肺病の為床に就いたままである」とするべきであろう。杜甫は晩年、玄宗皇帝の昔を懐かしみ、国乱れて各地を流浪しながら、国の先行きを憂うる気持を詩のほしほしに述べている。

同じように第6句「多情杜牧尚談兵」を「多情の杜牧はなお

張文宏「正岡子規漢詩の考察——中国古典の受容の様相——」の漢詩について(高橋)

兵士の話を詩吟にする」では句の真意とは程遠い。杜牧が揚州に官吏として勤めていた時、しばしば妓楼に通って風流を尽くしたが、杜牧詩(遣懷)に「落魄江湖」載酒行 楚腰纖細掌中輕 十年一覺揚州夢 贏得_チタリ青樓薄倖名」とあるのは揚州のことを追懐したもので、彼の「多情」は「載酒行」「楚腰纖細」「揚州夢」「青樓薄倖名」などに象徴されている。多情は妓楼での遊び、としては問題もあるが、文人であることも含め多感な行動を集約して謂うのであろう。「青樓」は妓楼、「薄倖」は放蕩者。子規のこの句は「私は杜牧でもあるかのように情多き者であるが、それでも尚この非常時に際しては戦のことを談ぜざるを得ない」として初めて筋が通ると思っ

ている。
第7句「枕戈死難將軍在」を「兵器を枕にして戦争で死んだ兵士は多いが、將軍はまだ生きていゝ」とするが「枕戈死難」は「將軍」の形容であると思っっている。つまりここは「戦場に出て国難のために命を捨てた將軍もいた」との意味だと思っっている。日清戦役では明治二十八年一月に占領砲台視察中に艦砲射撃を受け大寺陸軍少将が亡くなっているが、この句がこの件を指すかどうかは確信がない。

最終句「樽俎誰能開泰平」を「樽俎を持つ將軍たちは誰が一体平和の世界を創れるのか」としてはとても筋の通る解釈とは

思えない。この「樽俎」は宴席での相談ごと、つまり外交交渉の喻えとして使われているのであって、ここは「外交交渉のみでは一体誰が平和への道を開くことができるだろうか。とてもそんなことは考えられない」とするべきところではなからうか。明治二十八年三月、李鴻章が来日し下関条約が結ばれたが、暴漢に由る李鴻章狙撃事件があり、また直後に三国干渉もあり、実際には戦役の終焉までに外交の部分は大きかったのである。

通釈「年齢だけは増えたのに身体は衰え、樹てた志も未だ成らない／この世の何処に余生を托すればよいのだろうか／遼東まで行ってみるとおりしもの夕陽の中、戦は既に終わろうとしていたが／台北には土着民の反乱があり不穩の気配が蟻ついている／私は杜甫であるかのように国を憂えているが、その気持ちも空しく肺疾の為床に就いたままである／また私は杜牧のように多感な文人にすぎないが、それでも尚この非常時に際しては戦のことを談ぜざるを得ない／戦場に出て国難のために命を捨てた將軍もいたことだ／外交交渉のみでは一体誰が平和への道を開くことができるだろうか。とてもそんなことは考えられない」

四 題小説後似著者某(27頁) 小説二題シ後著者某二似ス

- 1 夢中書就事尤奇 夢中二書ノ就ルハ事尤モ奇ナリ
 - 2 仮説寓言寫所思 仮説寓言思フ所ヲ寫ス
 - 3 彩筆生花眞可羨 彩筆生花眞ニ羨ム可シ
 - 4 虚心化蝶亦徒爲 虚心化蝶亦徒ナランヤ
 - 5 秀英才子麒麟種 秀英ノ才子麒麟ノ種
 - 6 窈窕佳人桃李姿 窈窕ノ佳人桃李ノ姿
 - 7 卷裡名流一堂會 卷裡ノ名流一堂ニ會シ(註)
 - 8 共據胸臆是何時 共ニ胸臆ヲ據ベルハ是レ何レノ時ゾ
- 張氏通釈「夢の中で書いた事は最もおかし。仮説と寓言を借りて自分の言いたい事を書いている。李白は、使っている筆の先に花が出てきたという夢を見てから、立派な詩歌が作れるようになったという。それは本当に羨ましい。莊子は虚しく蝶と変身して到底何もできないのだ。すぐれた才子は麒麟の種のように注目され、美しくしとやかな美人は桃の花のように好かれる。書籍の中には有名人が一堂に集まっているが、皆で共に思いを述べて胸の中を発散させようか。」

第3句「彩筆生花」を李白の挿話とするが、「彩筆」が六朝・江淹の五色筆の挿話、「生花」が李白の生花筆の挿話である。

第4句「亦徒爲」を「亦徒爲ならんや」と読むが「亦徒ナラ

ンヤ」と読みたい。また「爲」は句末に用いる疑問、反語でここでは「ヤ」に相当する。『子規全集』の書き下し文の項では「亦徒爲ならんや」となっているが、ここはどうしても「亦徒ナランヤ」とすべきと思う。これを「到底何もできないのだ」の意とするが「これまた無駄な事だろうか。いや意味のあることなのだ」と逆の意味になるべきだろうか。

ここは対句であるから「可羨」なら「徒爲」となるべきところだが、「蝶ト化ス亦爲スコト徒ナリ」と肯定文では筋が通らない。某氏の小説を褒める詩意であるべきだから、「亦徒ナランヤ」と反語になるべきところである。「徒爲」としても「徒爲」としても品詞の一致は崩れて前句と対偶していない。せめて「可羨」はカセンと読んで「徒ナランヤ」と対だとしておくべきかもしれない。

第7、8句は一連の文章になっていて、「小説に登場の名士たちが一堂に会して、胸襟を開いて語り合えるのはいつの日になるだろうか」と謂うのだと思われる。

この詩は小説の題詩であることを考慮して解釈する必要がある。多分詩の後半は小説の内容に関わっているのであろう。明治二十年頃には才子と佳人のロマンスを描く漢文の白話文小説がいくつか出ており、三木貞一（愛花）の『情天比翼縁』(明治十六年版権免許)が代表的なものである。主人公の災厄、波

瀾があつて最後は多く、登場人物が一堂に会して大団円のうちに終る他愛の無いものであるが、漢文それも白話文で書くといふのは江戸時代から続く伝統があるとはいへ、それなりの熟練、言葉の知識を要することであり、また寓意表現の多い華麗な文体でもある。本詩の第5〜8句を見るとこのような類の小説であつた可能性が極めて高いと考へている。すると第4句「化蝶」は必ずしも莊周の「夢爲胡蝶」を意味するのではなく蝶が花に戯れるような男女の話なのではなからうか。

通釈「君の小説が」夢のなかで完成したという話は全く不思議なことだね／仮の話や喩え話を利用して言いたいことをうまく表現するのだ／江淹の五色筆や李白の生花筆も夢の中のできごとだが、彼らに劣らぬ見事な文章は羨ましいかぎりだ／心の赴くままに蝶となって花と戯れるのは一見何の役にもたたないことのようにみえるが、意味のあることなのだ／名門の生れの優れた才子に／配するに淑やかで美しく正に桃李にも比すべき佳人の姿を以てするのだ／この小説登場の名士たちが一堂に会して／胸の思いを語り合つて大団円を迎えるのはいつの頃になるのだろうか」

五 偶成 (28頁)

嘗來世事幾甘辛 世事ヲ嘗メ來ル幾甘辛

嬉笑常稀感慨頻 嬉笑スルコト常ニ稀ニ感慨頻ナリ

六歳歸郷民變俗 六歳ニシテ郷ニ歸リ民 俗ヲ變ヌ

十旬臥病硯留塵 十旬病ニ臥シ硯 塵ヲ留ム

爲周爲蝶夢中夢 周ト爲リ蝶ト爲ルハ夢中ノ夢

作佛作仙人外人 佛ト作り仙人ト作ルハ外人ノ人

開悟煉形別無術 悟ヲ開キ形ヲ煉ル別ニ術無シ

蝸蘆靜坐好安身 蝸蘆ニ靜坐シ好ク身ヲ安ンゼン

張氏通釈「世の中で、幾つかの楽しさと辛さを味わいながら生きてゐる。たまには笑い戯れることもあるが、人生に嘆くこともよく聞こえてくる。私は六歳頃ふるさとに帰ると、地元の人が俗事を変えることに気づいた。しかし、私は十年間病氣にかかっているので、文章を書くことができずに、硯に埃が溜まっている。そして、いつも莊周となり、蝶となることを夢見る。また人間世界を脱して仏となり仙人ともなりたい。それに悟りを開き心を磨きたいが、残念ながら、道術が全くわからぬ。だから、私は蝸牛のように小屋に靜坐して、身を安住させることを好しとする。」

語釈「民」ここでは自称つまり我。「變俗」は改変原有的習

俗(これまでの做いを変える)。子規は六歳(滿五歳)の時父親が亡くなり家督を継いでいる。これによりこれまでと周りとの関係が変化したのであろう。

通釈「私はこれまで何度この世の喜びや辛酸を嘗めてきたとか／考えてみれば心から喜んで笑うことは滅多になかったとの感慨が頻りにおきる／振り返ってみれば六歳で郷に帰り家督を継いだことで生活が変ることになった／病に臥すこと十年に亘ってみれば硯には塵が溜まるほど使うことが少なくなつた／夢に周となりまたその夢に蝶となる。その自由にあこがれても夢にすぎない／仏となり仙となる。いずれも特別な人に見許されることだ／悟りを開き肉体を修練しようとするが、私には格別その手段があるわけではないので／蝸牛のように家に繋がれて靜かに坐して、深くこの身を晏如に保つことに専念している次第。」

形而上的表現に対しては、意図を探るのは難しいが出来得る限り各句の連繋は保ちたい。

六 前赤壁画 (15頁)

白露横江赤壁秋 白露江ニ横タハル赤壁ノ秋

清風明月作遨遊 清風明月ニ遨遊ヲ作ス

舳艫千里今安在 舳艫千里今安クニカ在ル

不及風流一葉舟 及バズ風流一葉ノ舟二

この詩においては主な問題は通釈ではなく、典拠するところは何かという点である。勿論張氏の言うように『三国志』の「赤壁之戰」が題材であることは間違いないが、直接には蘇東坡の〈前赤壁賦〉が出典であることは詩題が〈前赤壁画〉とあることから分る。加えて詩の傍線部がすべて〈前赤壁賦〉にある語句に由来している。以下賦からの引用部分を列挙する。

「月出於東山之上 徘徊於斗牛之間 白露橫江 水光接天」

「壬戌之秋 七月既望 蘇子與客泛舟 遊於赤壁之下 清風

徐來 水波不興 舉酒屬客 誦明月之詩 歌窈窕之章」

「挾飛仙以遨遊 抱明月而長終知不可乎驟得」

「舳艫千里 旌旗蔽空 醜酒臨江 橫槊賦詩 固一世之雄也

而今安在哉」

「駕一葉之扁舟 舉匏樽以相屬 寄蜉蝣於天地 渺滄海之一

粟」

「惟江上之清風 山間之明月」

長大な〈前赤壁賦〉をうまく絶句二十八字にまとめている。だが説明不足は当然あるから解釈に於いては賦を理解して補足する必要がある。

張氏通釈「白露が江に横たわる秋頃、赤壁の戦いを思い出す。清らかな風と明るい月が天空へ昇っている。昔、赤壁には千里

ほど並んでいた軍船は、今どこにあるのか。それはあつても、風流な一葉の舟に及ばないだろう。」

起句「白露橫江赤壁秋」の「白露橫江」については『禮記・月令』に「孟秋之月 白露降 寒蟬鳴」とある。賦に「壬戌之秋 七月既望」とあるので丁度孟秋である。昔の人は露は天より降るものと考えた様で、「江二横タハル」というのは、実際には江上の霧を見ていると解される。

承句「清風明月作遨遊」の「遨遊」は「あそびたのしむ」意。張氏解では「清風と明月が天空に昇る（遨遊）」とするが、「蘇子與客泛舟 遊於赤壁之下」とあるので蘇東坡と客の二人が（清風と明月に誘われて）遨遊したと解するべきところである。

転句「舳艫千里今安在」…この部分、書き下し文で示せば「舳艫千里 旌旗空ヲ蔽フ 酒ヲ醜イデ江ニ臨ミ 槊ヲ横タヘテ詩ヲ賦ス 固ニ一世ノ雄也 而ルニ今安クニカ在ラン哉」となつて「今何処にあるのか」と問われているのは舳艫千里の軍船ではなく一世の雄たる曹操なのである。

結句「不及風流一葉舟」…「一葉舟」を含む書き下し文は「一葉ノ扁舟二駕シ 匏樽ヲ舉ゲテ以テ相屬シ 蜉蝣ヲ天地ニ寄セ 渺タル滄海ノ一粟ノミ」。意味は「君と私は」今たよらない小舟に乗って酒を互いに薦めあい、蜉蝣のようにはない命をこ

張文宏「正岡子規漢詩の考察——中国古典の受容の様相——」の漢詩について（高橋）

の世に托しているが、その存在は果てしない海に浮かぶ一つの粟のように微小だ」となるだろう。

通釈「白露が長江上に降りているここ赤壁の秋に／江上を渡る清風と折しもの明月に誘われて客と二人、舟遊びに出た／その昔赤壁に千里にもなる沢山の軍船を率いて戦った曹操は今何処にいますというのか（影も形もないではないか。まことにはかないことだ）／今我々は頼りない小舟に乗っているにすぎないが、清風明月を友にして酒を飲む風流には、江に酒を醸いだ曹操も及ばないに違いない。」

七 病中作（18頁）

- 1 蓼虫曾聽遂忘辛 蓼虫曾オホキ子聽キテ遂ニ辛ヲ忘ル
 - 2 多病慣病催興頻 多病オホキ痾ニ慣レ興 頻ニ催ス
 - 3 褥裡恰宜伴黄卷 褥裡恰モ宜シ黄卷ヲ伴フニ
 - 4 枕邊却喜遠紅塵 枕邊却テ喜ブ紅塵ヲ遠ザカルヲ
 - 5 未成窓雪囊螢業 未ダ成ラズ窓雪囊螢ノ業
 - 6 且作蓬頭垢面人 且ク作ス蓬頭垢面ノ人
 - 7 鏡影自驚吟骨瘦 鏡影自ラ驚ク吟骨瘦セタリ
 - 8 笑言白鶴是前身 笑ッテ言フ白鶴是レ前身ト
- 第1句「蓼虫曾聽遂忘辛」…子規は自分を「蓼虫」に擬えているのである。「蓼」は特有の辛味がある植物。「楚辭・東方朔・

七諫・怨世」に「蓼蟲不知徙乎葵菜」とある。この王逸注に「言蓼蟲處辛烈 食苦惡 不能知徙于葵菜食甘美 終以困苦而羸瘦也」とある。つまり「蓼蟲は辛烈な環境にいて食は甚だ粗末で、甘美な野菜に移ることを知らない。ついに困苦して瘦せるのだ」という。子規は病床に固定され自由の無い自分、甚だ瘦せた自分（第7、8句）を蓼虫に擬している。「聽」はここでは「受け入れる」意味。辛い環境も受け入れて遂には辛さを忘れるというのである。

第2句「多病慣病催興頻」慣れると辛い病も興味に換ると。
第3句「褥裡恰宜伴黄卷」病床に寝るのも書物を読むのによろしいと。

第4句「枕邊却喜遠紅塵」「紅塵」は煩わしい俗世間。

第5句「未成窓雪囊螢業」「窓雪囊螢」の業未だ成らずと。

第6句「且作蓬頭垢面人」暫くは「ぼつれ頭垢づら」のまま
でいようと。

第7句「鏡影自驚吟骨瘦」鏡に映る影に自分ながら驚くのはこの詩人の体が実に瘦せたことだ。「吟骨」は「詩人的瘦弱の身軀」（漢語大詞典）。

第8句「笑言白鶴是前身」「雲中白鶴」という成語がある。
『三国志・魏志・邴原別傳』に「邴君ノ所謂雲中ノ白鶴、鶻鶻之網ノ能ク羅（くま）ス所ニ非ズ」と。「高い空を飛ぶ白鶴は鶻や鷓など

を捕える網では捕まらない」の意で心は「高尚な人物は俗世間の煩わしいことにとらわれない」である。だから「笑言」には「自分で言うのもなんだが」の意が加わっている。鶴は「鶴のように痩せる」という言葉があるくらいであるから、勿論痩せていることの喩えとして使われているが「白鶴」となると「高尚な人物」の喩えが加わる。

張氏通釈「嘗て・蓼虫の声を聞き、遂に辛いことを忘れた。多病で治りにくい病に慣れたが、頻りに興しを催促されるようである。私は病床の布団の中でちようど書籍を伴い眠り、枕のものとで紅塵に遠ざかることを喜んでゐる。晉の孫康・車胤のような「囊螢映雪」の業績を遂げていないが、いちおう蓬頭垢面の人と成すだろうか。鏡に映った影を見て自ら驚きながら、骨まで痩せたことを嘆いた。「白鶴がわたしの前世の身ですよ」と笑って言った。」

通釈「蓼虫のように辛い環境を受け入れていると遂にはその辛さを忘れてしまふ／多くの病気を患うと、それに慣れてしまつていろいろのことに興味が湧いてくるのだ／病床で寝ていると書物に親しむのにちようど宜しいうえ／枕の傍に縛られていると却って煩わしい俗事から離れられるという効用もある／未だ蜜雪の功は成らないが／暫くは病をさいわいに身なりに構わないでおこう／鏡に映してみても自分ながら驚いたのはこの

詩人の身体が実に痩せたことだ／これだけ痩せているところを見ると私の前身はきつと白鶴なのだろう。つまり高尚な人間で俗世間を超越しているのだよ、と笑って言っておこうじゃないか。」

八 その他三首

以下については要点のみを述べる。

(イ) 詠史(6頁)

昔日良姻今惡姻 昔日ノ良姻今惡姻

鶴岡堂裡翠眉顰 鶴岡堂裡翠眉顰ム

數聲歌曲數行淚 數聲ノ歌曲數行ノ淚

想看当年虞美人 想ヒ看ル当年ノ虞美人

張氏は「虞美人」について縷々説明するが、この詩、「虞美人」はつけたりであつて、中心になるのは「鶴岡堂」で翠眉を顰め數行の涙を流した女性である。私見ではこの女性も源頼朝の前において、鶴ヶ岡八幡宮で舞をみせた静御前であろう。虞美人を思い出したというのは、項羽と義経の運命が相似ているからである。「數聲歌曲」とはこの時歌つたという「しずやしずしずのおだまきくりかえし 昔を今になすよしもがな」「吉野山峰の白雪ふみわけて入りにし人の跡ぞ戀しき」の二つの歌をいうのであろう。勿論張氏は子規の中国古典の借用を主題にする

のだが、詩の理解のためには「静御前」から始めないとせず「虞美人」なのかが分らない。

(口) 詠史 (13頁)

畢竟祖龍謀太拙 畢竟祖龍 謀太拙

興秦未了又凶秦 秦ヲ興ス未ダ了ラザルニ又秦ヲ凶ボス

当年知否燒書日 当年知ルヤ否ヤ燒書ノ日

煽起炎劉火德新 炎 劉ヲ煽起シテ火德新ナラシムルヲ

張氏は結句を「劉邦が炎を煽ることが徳新となるか否かは、誰もが知らなかった」とするが読みにおいて「炎 劉ヲ煽起シテ」としているのだからそのまま「(燒書の) 炎が劉邦を煽起して(秦を滅ぼすに至ったのだ)」とするべきであろう。また「徳新」とするより「火徳(=火の功能)」として「火の功能が新たに一つ増えたことは当時分っていたのかどうか」とした方が明解ではなからうか。

(ハ) 玄徳訪孔明草廬図 (14頁)

三分天下亂茫茫 三分ノ天下亂ルルコト茫茫

野有遺賢深自蔵 野ニ遺賢有リテ深ク自ラ蔵ス

一路隆中應非遠 一路隆中應ニ遠ク非ザルベシ

馬頭山水不尋常 馬頭ノ山水尋常ナラズ

結句について張氏は「この山水の風景は尋常ではない」と解するが「馬頭」について触れていない。「この」としているところを見ると地名との考えかもしれない。ここは騎馬行の「劉備、關羽、張飛三名が「馬上に見た山水」の意味だと思っ

九 おわりに

漢詩について論ずる場合に、漢詩をどのように読みとったかという点は前提として重要なことは勿論である。百人が解釈すれば百通りの理解があり得るということは分るが、言語機能の基本に立ち返ってみれば、ある語句、詩全体に亘る表現に拠って各人に共通のイメージ、共通の理解が得られる部分が大きくないと、論ずることが意味をなさなくなるのみならず、つきつめれば言語による意思疎通自体の基盤が失われることになる。

ある詩について二つの解釈がある場合に、どちらをとるべきか、どちらが作者の意図かを判ずるのに重要なのは各語、各句の間の連繋の良否、延いては全体の筋の通り具合の優劣であろう。筆者の解が正しいと云い募るつもりはないが、張氏解はやもすると逐語的な傾向があつて全体の筋がおろそかになつてはいないだろうか。

例えば「七（病中作）」の第1句「蓼虫曾聽遂忘辛」において「嘗て蓼虫の声を聞き、遂に辛いことを忘れた」とするのはどうみても話の筋が通っていない。調べてみると前提として、「蓼虫」は蓼という辛い植物に取りついていて良菜へ移動することもできず、甚だ厳しい環境にある話になっている。また「聽」と「聞」では少しく意味が違ふところがあつて、「聽」には聽許（ききいれる）接受（受け入れる）意味がある。また「曾」は「嘗て」と過去の意味ばかりでなく「すなわち」「かねて」なども重要である。これらから「蓼虫はすなわちその辛い環境を受け入れて過ぐすうち、ついには辛さを忘れることになつた」とすれば一応筋は通る。そして辛い環境が子規の病と重なることを考えれば、こちらの方がよさそうに思えるのである。

子規の用語はほぼ用例に基いており、勝手な和風の造語は殆ど無いことが今回の僅かな詩量からも分る。特に三（感懷）詩の「浮雲」を土着民反乱の喩えに使うような、あえていうなら難度の高い用法は、漢詩人としての知識の深さを示しているだろう。

今回張氏がとりあげた子規の漢詩十九（序文の一首を加え）のうち、十一詩の主として解釈、時には典拠するところにつき私見を述べた。

文献及び註

- (1) 張文宏：『正岡子規漢詩の考察——中国古典受容の様相』、『皇學館論叢』、第四十七卷（第六号）、平成二十六年十二月、一—三二頁。
- (2) 渡部勝己：『子規全集第八卷・漢詩・新体詩』（講談社）、解題漢詩、昭和五十一年、六七九頁。
- (3) 一海知義：『初期の詩——鷗外と漱石——』、『鷗外歴史文学集第十三卷月報九、二〇〇一年、四頁。
- (4) 佐藤利行：『正岡子規の漢詩』、『広島大学大学院文学研究科論集』、六十八卷、平成二十年十二月、一—三頁。
- (5) 張文宏：『正岡子規漢詩の考察——中国古典受容の様相』、『皇學館論叢』、第四十七卷（第六号）、平成二十六年十二月、三頁。
- (6) 張文宏：『正岡子規漢詩の考察——中国古典受容の様相』、『皇學館論叢』、第四十七卷（第六号）、平成二十六年十二月、二五頁。
- (7) 三木愛花：『情天比翼縁』、徳田武校注『新日本古典文学大系 漢文小説集』、岩波書店、二〇〇五年、一七七—二六二頁。
- (8) 正岡子規：『子規全集第八卷・漢詩・新体詩』（講談社）、昭和五十一年、一二五頁。

註1…近体詩においては、一般に孤平を避けなくてはならないが、特に五言の第二字、七言の第四字の孤平を禁じている。なお佐藤利行の〈聞子規〉詩の平仄判定は必ずしも正確ではない。

註2…「不如歸去」は杜鵑の鳴き声を模した言葉であるが、意味は「帰り去るにしかず」「帰りたい」「望帝の帰るべき蜀が亡びているので「帰りたいが帰れない」と悲痛に鳴いて血を吐いたという故事に由来。

註3…「軒」の家屋を数える量詞(数助詞)としての用法は日本独特或は和臭的である。「間」の量詞としての用法は動作回数、柱と柱の間、部屋数、家屋数、片などに及んでいる。家屋を数える時は「軒」よりも「間」を使うのである。註4…張氏はこの句の第二字「里」とするが『子規全集第八卷』⁽⁸⁾では「裡」になっている。全集に従った。

(たかはし よういち・森鷗外記念会々員)